

緑爽会会報 No. 162

2019年6月24日発行
日本山岳会 緑爽会
発行人 富澤克禮



デザイン・制作 関塚貞亨

〜〜 《報告》 〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

5月山行報告 高尾山の新緑と植物を楽しむ

実施日：5月30日（木） 参加者：9名（写真参照）

今回の山歩きでは「サイハイラン」「ムヨウラン」そして目玉である「セッコク」といった花を、新緑の中で楽しむことを目的としていた。幸い時期も良く、天気にも恵まれて、これらの課題はすべてクリアできた。反省点がないのが反省だ、などという声さえ聞かれた。タツナミソウ、イナモリソウといった花や、高尾山で最初に発見されたタカオヒゴタイのバイオリン形の葉なども鑑賞でき、また、ひらひら舞うアサギマダラにも出会うことができた。キンラン・ギンランは残念ながら花が終わっていたが、高尾山の自然の豊かさを感じられた山歩きとなった。また老若男女を問わず難易度の違う幾つものルートがあり、目的も健康登山、八十八大師巡り、精進料理など幅広いジャンルに対応できること、それが人気の理由だろう。人の多いのが玉に瑕だが、今回は山頂は別として、比較的静かな山歩きができたと思う。季節を変えて何度も登っているが、まだまだ知らない世界もあり、行くたびに新しい発見がある。それが高尾山の魅力と言えるだろう。

[コースタイム]高尾駅8:50⇒9:10 駒木野庭園 9:25⇒10:30 蛇滝 10:35⇒11:00 十一丁目茶屋 11:10⇒11:35 薬王院 11:45⇒12:10 かしき谷園地 12:45⇒13:05 高尾山山頂 13:15⇒5号路～稲荷山コース⇒13:50 6号路～14:20 大山橋 14:35⇒15:45 高尾山山頂 15:45
(報告：富澤克禮 写真：荒井正人)



(後列左から) 横関邦子、瀬戸英隆、荒井正人、富澤克禮、夏原寿一、渡邊貞信、島田稔 (前列) 鳥橋祥子、渡部温子

花を求めて2万歩

瀬戸 英隆

大快晴のこの日、集まった9名の仲間がJR高尾駅北口を出発したのは9時少し前だった。高尾山城の花々を求めて左に進み、民家の間を通り抜け、駒木野庭園まで20分足らず。ここで富澤リーダーから本日のコースの概略説明、ベテラン島田さんからは貴重な案内図をいただく。高尾山城に年間100日は出かけて、健康登山の回数が400回を超えている富澤さん。長らくこの山城のサポートレンジャーを務めている島田さんという、心強いお二人が今日の中心人物。さぞいい「花見」の旅になることが約束されている。いつも頂上に立つだけの筆者はやや気後れを感じたが後に続く。蛇滝口まで出発から1時間半。

そろそろ花の道となって、この日最初の話題となった「ウワバミソウ（山菜としてはミズ）」を見る。葉を手に取り富澤さんの話に熱が入る。行場では「イワタバコ」。その後の登山道では「ウリノキの花」「テイカカズラ」や「マルバウツギ」など。11時過ぎに十一丁目茶屋に着き少し休む。これからは一般ハイキングコースを歩くが、ちょっと道を外れて葉が面白い形の「タカオヒゴタイ」、波のような「タツナミソウ」などを見ていく。更に権現茶屋でも寄り道して「サイハイラン」「ムヨウラン」などを見た。薬王院を過ぎ、かしき谷園地でシートを広げ昼食。この「ササバギンラン」の花は終わっていた。いつもながら皆さんからいろいろおかずやお菓子の提供を受ける。有難し。

山頂には13時過ぎに到着し全員で記念撮影に収まる。帰路は5号路から稲荷山コースに出て、6号路に入る。

大山橋には14時半着。今日のハイライト「セッコク」がここから見えたらしいが、今は茂ってしまい良く見えない。それでも富澤さんたちはヤブっぼいところへ分け入って見に行ったようだ。ここから高尾山口までの間に、「セッコク」が見られるという。杉の木に着生するラン科の花だそうだが、遠くてよく分からない。あー、それで鳥橋さんや荒井さんが双眼鏡をもってきていたのだ。ともかく皆セッコクが見られたことで、今日の目的を達した思いがあったのだろう。高尾山口のケーブル駅内のセッコクも鑑賞し、一駅電車に乗って高尾駅南口での反省会が近づくと何となくみな元気。誰からともなく「今日の歩数は2万歩です」とのお知らせがあった。うむ、よくぞ歩いた！

(写真提供：渡邊貞信、次のページも)



タツナミソウ



サイハイラン

ため、無理して高価な最新型のスキー、ブーツ、金具、シール、ポール等を新調した。しかし特別上手にはならないが、仲間に迷惑をあまりかけない状態になったのである。そのお蔭で、東京で想像していた山スキーの夢が叶い、私はニセコの日々、ムイネ山、朝里岳、白井岳、十勝岳、旭岳等の斜面にシュプールを描くことが出来た。

私の家は札幌・荒井山ジャンプ台の裏側にある。新雪が降った日には家の前からスキーを履き、荒井山まで車道を一気に滑り降りて行く。途中小学生から「お爺さん、道路でスキーするのはいけないよ」と注意されることもある。滑り降りると5分で荒井山に到着する。新雪に覆われた斜面を見上げると、私の心は滑る期待の感情が上がってくるのである。

20年前まで荒井山は市民スキー場であった。このスキー場は札幌でも古く、1930年（昭和5年）第1回宮様スキー大会が開催されたスキー場であった。

1947年（昭和22年）戦後最初の全札幌小学校スキー大会が荒井山で開催された。私は運よく大回転競技で優勝したスキー場でもあった。

1990年代の経済不況によりスキー人口が急激に減少したことで、2000年にリフトは外されスキー場ではなくなってしまった。現在は隣の大倉山小学校の校庭の一部になっている。

新雪が降ると誰も居ない最高のゲレンデとなる。15分くらいかけてゆっくり登り着く。札幌市街をしばし眺めてから滑り降りる。滑り降りると、新雪に描いたシュプールを見上げて問題点をチェックする。自己満足してまた登り始める。途中1回休み呼吸を整えからまた登る。頂上に着いたらすぐに方向を決めて滑り降りる。3回繰り返して家に帰る。午前中でスキーは終了する。

新雪が降ったある日、勇んで荒井山に行くと、斜面はスノーボードのシュプールが無数にあった。荒井山はもう私の一人のスキー場ではないと知った。

老人のせいか近頃寒い日の朝、早起きは辛くなった。ボーダーより早く起きて新雪を滑る情熱が無くなったのである。荒井山での新雪スキーは、哀しいかな無理になったと思った。

郊外への山スキーへ行くときは朝早く仲間が迎えに来る。無理してやせ我慢して出かけるのである。車中で、荒井山でのスプールの頭を描いている。ところが、現実はそのとはいかない。シールを付けて2時間余を登り、滑り出すと最初は快適である。しかし次第にスピードコントロールが出来ず、コースとりが悪くなり転倒する。深雪では一人で起き上がることが出来ない。二人がかりでようやく立ち上がるのである。仲間にお礼を述べ、呼吸を整える。

その時ふと岩登りをしていて滑落したことが頭に浮かんだ。その場で冷静さを取り戻し、更に挑戦をしたことを思い出した。

しかし今は、老人が2度以上転倒すると、自分の体力、気力の衰えが増幅して感じる。更に自信を失うのである。山スキーは85歳が限度と思うこの頃である。

※編集部より主に最近入会の会員へ

芳賀孝郎さんは1958（昭和33）年、学習院大学卒業。大学山岳部で活躍され、同年5月京大士山岳会チョゴリザ登山隊に参加。2001（平成13）年より日本山岳会副会長。皇太子殿下（当時）のお世話役を務める。実業人としては芳賀スキー社長として活躍された。緑爽会では、2010（平成22）年12月に「楽しかりし先輩たちとのクラブライフ」と題して講演された。奥様の淳子さまは三田幸夫元会長のご令嬢で日本山岳会会員、アルパインスケッチクラブ所属。

相良嘉美著「香料商が語る東西香り秘話」(山と溪谷社刊)を読む

近藤 緑

このところ、病床にある夫(近藤信行)の許へ贈られてくる書籍を代わりに読んで、礼状を書くことが日課になっている。この本もそうした本の一冊。著者は1938年生れ。東大英文科を卒業後、長谷川香料(株)に入社して退職するまでの47年間を「香料」ひとすじに生きて来た人である。その梗概を紹介すると・・・

第1章 香りの世界に生きる人々 では 地中海沿岸ニースから西のグラスにかけて活躍した天才的な調香師たちを紹介している。ナポレオン三世妃ウジェニーや大女優サラ・ベルナルの衣装を手がけたウォルト家から香水業を起こしたジャック・ウォルト。アール・エ・パルファン(芸術と香水)を起業したエドモン・ルドニッカ夫妻。夫の死後、その志を継いだテレーズ夫人をはじめ、第一次世界大戦後、男たちに代わって香水創りに参入した女性たちを紹介して、日本女性の社会進出を呼び掛けている。

第2章 香水の軌跡 人類が最初神に捧げるものとしたのは焚香と香油だった。香油から香水に発展したのは、アラブのアルコール蒸留技術が中世ヨーロッパに伝わってからである。

「ラベンダー水」や、バラや柑橘類をアルコールに漬けこんだ「生命の水」を作り出したのはヨーロッパ各地の修道院だった。19世紀、まだまだ不衛生な生活をしていた人々にとって、それらは疫病除けの治療薬として使われた。ベルサイユ宮殿でマリー・アントワネットの舞踏会が催される頃には、今で言う「オーデコロン」が騎士たちの間に流行し、革命後はブルジョア階級が、その上得意となった。

第3章 魅惑のローズ史 古くから香料として珍重されて来たローズについての考証。紀元前8世紀頃からトルコ西岸に咲いていたオールドローズが、ギリシャを経てローマからフランスに伝わった。アラブ諸国では今も水盤に手を濯ぐ「ローズウォーター」を用意して歓迎の意を表すという。また砂漠に行く旅人たちには「ローズウォーター」に砂糖を加えたシロップが欠かせなかった。皇帝ネロはじめローマの人々が愛したローズ。一方、キリスト教会では、その香りが官能を刺激するという理由で忌避したが、ルネサンス以後は法王が聖母マリアに「神秘のローズ」と呼び掛けるまでになる。

第4章 香りの原料とは 生のまま食用香料となる素材をハーブと言い、コショウ・シナモン・ナツメグ等、舶来の乾物類を香辛料と言う。「千夜一夜物語」を引用しながら著者の専門知識を展開している。

第5章 香料商のはじまり——ならず者たち 1000年頃からヨーロッパの人口が増え、新しい居住地が広がって行った。まだフランスもならず者たちの國だった。グラスのなめし皮職人がギンバイカの葉の粉を用いてなめし、緑色をした香りの良い革を作ったことが、グラスの街づくりの始まりだったと説く。

第6章 日本人の香り感覚 縄文以来、クスノキの香りと共に生活して来た日本人。民俗学的な考察及び森林浴や免疫力強化など現代的な自然利用のすすめ。

第7章 香辛商の未来——食品と化粧品 香料の需要に於いて化粧品業界と食品業界が拮抗する今日、その安全性が問われることは言うまでもない。自然素材と共に合成素材の開発が進んでいる。著者はアメリカ式の大量生産志向にクギを刺し、グラスを天然香料抽出のハイテク基地としたいと結んでいる。

紙幅の関係で大雑把な紹介になったが、興味のある人には図書室での閲覧をお薦めする。ヤマケイ新書1冊のなかに、香料を軸とした世界の歴史・地理・文化全般が語られ、さながら百科辞典の重みがある。中でもクレオパトラや楊貴妃、ゲーテからフランソワーズ・サガン、さらにペリー来航にまつわる話などの挿話が面白い。文学専攻の著者ならではと思った。

著者の夫人相良泰子さん（四国支部）は、小島烏水の孫に当る。そんな関係から、この本を贈られた。著者である嘉美氏は佐賀県生まれ。高松出身の烏水と血縁はないが、大正時代に横浜正金銀行サンフランシスコ支店長を務めた烏水と同じく、世界を巡り歩いた国際人であることは感慨ふかい。今では病気がちと聞く嘉美氏のご健勝を祈りつつ筆を置く。

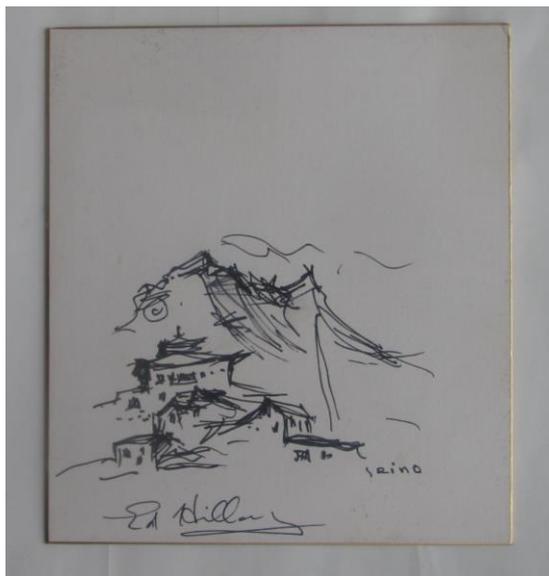
E・ヒラリー卿の色紙と早川瑠璃子さん

吉田 理一

新潟県魚沼市の私の書斎にはE・ヒラリー卿の色紙が飾ってある。生前の早川瑠璃子さんからいただいた色紙である。「私がいなくなればこの色紙の価値を分からない人は捨ててしまうかもしれない、今のうちに山の本を大切にしている吉田さんに差し上げておきます」と上京の折、手渡しでいただいたものである。

額裏の溜まった埃の清掃を兼ねて11年ぶりに床に降ろしてみた。額の裏にはこの色紙が我が家になぜあるのか、当時調べた山岳会の会報「山」のコピーや色紙に添えられていた早川さんからの通信文と一緒に収められていた。私がいなくなった後もこの色紙の由来が分かるように当時きちんと資料を纏めておいたのを思い出した。

この色紙が書かれたのは昭和61（1986）年8月9日、場所は東京日比谷松本楼、行事名は「ヒラリー卿を囲む歓談の夕べ」、主催はJAC海外委員会、色紙に添えられている絵は清野恒画伯によるネパールの僧院であることが容易に分かった。資料を記録して保存しておくことが後々いかに役立つかを改めて知らされた。



色紙に添えられていた早川さんの文書を改めて読んでみて、ご自分が亡き後も安全に保管してもらえる拙宅に避難させるためともう一つの理由は私の退職記念としてであった。

私は平成20年3月31日付で38年間務めた職場を60才で定年退職しました、この色紙は同年7月26日にいただきました。早川さんはその5年後の平成25年9月に急逝されました。

色紙に添えられていた早川さんの文書を一部紹介します。（原文通り）

私 家の中を整理していましたら二枚の色紙が出てまいりました。 昭和61年8月9日、日比谷松本楼 日本山岳会海外委員会主催 エドモンド・ヒラリー卿が来日されましてその頃海外委員会の委員でございました 私は会場設営をさせて頂いて居りました ヒラリー卿は

夕食会6時でしたが三〇分も早くお見えになりましたので用意しておいた色紙にサインをお願いしました。山岳会用一枚と私は自分のために二枚サインを頂きました。一枚は名前だと云われ、ルリ子・ハヤカワと申しますと私の名前を入れて下さいました。もう一枚は名前なしです。

そのそばに清野恒画伯が居られ「早川さん画いてあげるヨ」と添え画を書いて下さったのです。この方も有名な山岳画家です。亡くなりました。

ヒラリー氏は今年1月頃亡くなりました。会報に清野画伯とヒラリー氏のお付き合いの記事が載っていますのでおしらせ下さいませ。吉田さんが定年でおつとめを終わられたとき当初山岳会のTシャツでもとお祝いを考えて居りましたが過日整理しておりましたら色紙が二枚出て来ました。貴男だったらきっと大切に扱って下さると思いお祝いの心にかえさせて頂きます。私にとっては宝ものですが二枚はもったいない。もう一枚は軸にして茶会に使うつもりです。どうぞお納めくださいませ。

七月二十六日

早川瑠璃子

吉田理一様

- ※ ヒラリー卿と清野画伯の交友関係については会報「山」754号(2008年3月20日)に「ヒラリーと画家の清野さん」と題して成川隆顕氏が詳しく述べています。
- ※ ヒラリー卿歓迎会の様子は会報「山」496号(1986年10月20日)に鈴木郭之氏が「ヒラリー卿を囲む歓談の夕べ」と題する報告文を載せています。

早川さんはご自分の所蔵している山岳書の行く末を早くから考えていたようです。「新潟の人は広い家にお住まいでしょうから山の本は何れ新潟に送ります」と私に話していましたが突然亡くなられました。故人の遺志を継いで夫君定男様、御令嬢理奈子様は早川さんが亡くなられた4か月後の平成26年1月、数百冊の山の本を段ボール5箱で送って下さいました。この件に関しましては会報「山」826号(2014年3月20日)に「故早川瑠璃子永年会員の山岳図書が届く」と題した私の投稿文が掲載されています。この会報をご覧になった山岳書に造詣の深い緑爽会会員お二人からお便りをいただきました。「早川さんの蔵書の落ち着き場所が決まってよかったですね」・「吉田さんが把握していない早川さんの執筆した文章が載っている書物の情報」というありがたいお便りでした。

早川蔵書で一件だけ未解明の課題があります、「エドモンド・ヒラリー」と「ラインホルト・メスナー」が連名でサインした本がありますが具体的に何時どこでいただいたものか、仕事も時間的に少しゆとりが出来ましたので楽しみながら検証しようと思います。

※編集部注：早川瑠璃子さんは2013年9月に亡くなられました。「山岳」第109年(2014年)に、当会会員の山口節子さんが追悼文を書かれています。

長瀨にて

小原 茂延

年初まもなく、健康を損ねて登山はもとより、遠出もできないとあって視界は常に人工的な世界のみ、鬱屈した気持ちが晴れない。インド医学でいう「アーユルヴェーダ」では人間の個性・体質を三つのタイプに分けているが、小生の場合、どうも「ピッタ」と呼ばれる気質であるらしく、心身に乱れを感じた処方として「美しい自然(特に川や湖)に多く触れましょう」と指導書にある。そんなことから、自宅の近くを流れる荒川の上流にある景勝地の長瀨に新緑を訪ねることにした。荒川は甲武信ヶ岳を源流として全長173km、秩父、寄居、熊谷、川口市などを流下して東京湾に注ぐ一級河川である。

今年3月16日から運行を開始した西武鉄道特急ラビュー号は、車窓からの視野が大きく取られているので新緑まぶしい奥武蔵の山や川を眺められ快適だ。かつてこの西武秩父線建設工事に携わった若き日がよみがえってくる。お世話になった地元の方々は達者であろうかと純朴な人情との交流を懐旧し、トンネルをくぐるうちに横瀬を過ぎ武甲山の痛々しい北面を仰ぐと西武秩父駅である。秩父鉄道に乗り換えて荒川の流れに沿って長瀨に着く。



遙か昔、小学校の遠足で来たのは昭和20年代後半だったろうか。土産にロウ石を買ったのだが、この滑石と言われる岩石が長瀨岩畳を成す基岩かと勘違いしていた。今回よく説明を読み観察すると、大半を占めるのは石墨片岩であることが分かる。この長瀨は「近代地質学発祥の地」と言われ、ナウマンやその教えを受けて日本の地質学の礎を創った学者が調査に来ている。

大正5年(1916年)に宮沢賢治がこの地を訪れたことが知られている。賢治は当時、盛岡高等農林の生徒で地質学の研修を目的とした旅行であった。当時20歳の賢治は調査した秩父各地で短歌を詠んでいて、その歌碑が建てられているが、ここ上長瀨に近い埼玉県自然博物館のある岸边近くには、彼の生地岩手県の名山である岩手山の形状に似た石に、

つくづく「粹なもやうの博多帯」荒川岸の片岩のいろ 賢治

と彫られている。付近の説明板には「虎岩」の表題で、目の前の荒川河床に横たわる茶褐色の岩石を土地の人は「虎岩」と呼んでいること、結晶片岩の一種でスティルプノメレンや石墨、石英、方解石などの鉱物が地下深部で層状になり、地殻変動の影響などで曲がりくねった為、あたかも虎の毛皮模様に見える」と書かれている。

近くに一もとの木が植えられていて、宮沢賢治が好んだ樹木で「ドロノキ(白楊)」とあるのを見て吃驚、「緑爽会報158号」で筆者が紹介した植物を賢治も愛していて、賢治の出身地である岩手県花巻市のギンドロ公園の苗を育てたとの説明が付されていた。(写真：小原さん撮影)



南米縦断の旅

渡邊 貞信

2019年4月23日～5月9日 19日間の長旅であったが久しぶりの海外旅行で地球の裏側を垣間見てきた旅行記である。

人生の大きな区切りの年80歳も近付き、そろそろ終岳宣言をしようかな？などと考えていた時に一通のメールが舞い込んだ。いつもお互いにトレッキング情報を交換したり、スキーも楽しむ山仲間からである。

彼女は古希を迎えてなお現役で帝国ホテル・タワービル14階、西オーストラリア日本代表部でマネージャーとして働いている、自然を愛する女史である。単独でヒマラヤのゴークョピークへ登山したり活発に活動している。

さて、是非会いたいとのことで銀座まで出かけて話を聞くことになった。話の内容は突然に南米に行く計画があるので是非一緒に行きたいという。それには訳があった、今年の今頃やはり5月の連休を利用して南米クスコ周辺をトレックする際に誘われたのであるが、折しも緑爽会の総会とぶつかり、私だけ一人で後追いをして南米のどこかで落ち合おうとの話であって、日程的に折り合わず丁重にお断りした経緯があった。

南米には行ったことも無いし、今回は幸い緑爽会総会とも日程的にずれているし地球の裏側のアンデス地方にも興味があったので、詳細計画を把握しないままに翌日にはGOの返事を返した。

ツアーには乗らず、自前の格安トレッキングで自分たちが行きたい所を自分達が企画して計画手配するいつもの方式である。今回は男性2名、女性3名で計5名のパーティーとなった。(私以外は三郷市の山の会の会員で今回が互いに初山行である。)

19日間の長丁場で、あの広い中南米、メキシコ、アルゼンチン、ブラジル、チリ、ボリビア、ペルー等6カ国を踏破する計画で、早速、各々が受け持った分担地域へのアクセス、宿の手配、観光情報の把握、現地通貨の見積もりなど事前の調査が始まった。

昔と違って、今や在日各国の観光局等直に訪問できる窓口は無く、現地情報は全てインターネット検索で入手したり手配する世の中となり、便利な反面、普段パソコンやスマホを使い慣れていない年配者にとっては大変な世界である。こうして、翌日から今まで以上に毎日インターネットとの付き合いが始まった。

出発までに5回の会合で詳細の行程を詰めたが、明確なリスponsが無かったり、支払い条件がかみ合わない等事前に手配出来なかった所は現地での対処とした。



【概略行程】メキシコシティ経由2日かかりでアルゼンチンの首都、ブエノスアイレスに入り、翌日には1000km離れたブラジルに飛び、世界遺産イグアスの滝を。また翌日はアルゼンチン側からのイグアスの滝を見ながらのトレッキング。次にアンデス地方の中核都市のサルタに飛びアタカマ高地をトレッキング。その後、長距離バスで標高4500mを超えるアンデス山脈を横切り、チリのサンペドロ・デ・アタカマへ。そこでボリビアへ行くツアーを手配し、翌日今人気のウユニ塩湖を目指す。その日は塩で作ったホステルに泊まり高度順化を兼ねて約4000mの山をトレッキング。翌日、ウユニ塩湖の自然を満喫、トリック撮影等楽しむ。その後、長距離夜行バスで約600km離れた首都ラパスへ。ラパス近郊のトレッキングを体験してペルーのリマへ。旅の後半を楽しみメキシコシティ経由で帰る、という行程である。

【私の担当は】

旅の後半のボリビア及びペルーであった。特にボリビアは治安が悪く、夜行バス手配に於いては、7時間の行程の途中で乗り降りが有ると盗難などの原因となる為、ノンストップのバスを選定した。また、年寄り軍団に配慮してCamaと呼ばれる片側2列、通路を挟んで1列で160度フルフラット・リクライニングシートのバスを事前手配して無事、翌日早朝に目的地に着いた。高地を走行する為暖房付バスでぐっすり寝られて好評であった。

宿の選定に関しては、治安の良い地域であることは勿論のこと、コストパフォーマンス、例えばフリーwifiがあること、前日まで予約キャンセル無料OK、空港からのアクセスが良い所、ダウンタウンに近い所、朝食付きかどうか等最適な所を複数選び、ふるいにかけてという手順で選定した。

【アンデス高地の地形】

いつも、海外の山歩きから帰ってきて痛感することがある。それは日本の山や自然の綺麗なこと、素晴らしいことである。自分の生まれ育った日本であることを除いても、それらをいつも再認識させられる。

さて、今回の南米、アンデス地方については私が出発前に想像していた景色は岩山があり男性的な山容であったが、そうではなく広大な大地にたおやかな山容であった。それは4000mの標高の姿であって、5000mクラスの山の高度感は無かった。

そして緑の多い日本では見られない光景が広がり、一面茶色の世界であった。一年を通じて雨が少なく強烈な日差しで乾燥しきった土の世界である。湿度は体感的にはおそらく20%前後と思われるくらい乾燥しており、朝夕は涼しい。

植物と言えば保水性の良いサボテンが有るくらい、全く緑とは無縁の世界であった。特に印象深かったのは山の模様というか日本では見ることの出来ない地層であった。

2億5千万年前、まだ南米大陸とアフリカ大陸が地続きで一面大湿原であった頃、川が運んできた色々な成分や土砂等が積もり、その後の隆起や褶曲などの造山運動を経て現在のような地形になっていると云われる。

山の地肌の色は最大14色あると言われる。即ち、鉄分の多い所は赤色、川に堆積した植物などの成分は緑や黄色等に変化、また、色素が抜けて月面のように灰色になったりしたものもある。

今なお、174個の活火山があり、その噴出物シリカ、石英、ガラス等が白い砂丘を生み、間欠泉や温泉があり重要な観光資源となっている。

【高度順化／対応】

行く前からの課題であった問題。何故ならばアンデス地方は標高が高く常に富士山より高い標高での行動になるからである。

行く時期が夏なら事前に富士山に登る等訓練可能であるが春先ではそれは出来ない。

実際、アンデス越えでの最高到達点は4775mであった、バスを降りて歩くとハーハーと息苦しく容易ではない。スローペースで歩くが体がふわふわしてなんとも気分が悪い。幸い頭痛がする、吐き気をもようす等なく乗り切れたのは幸いであった。

今回、対策としてツアーによるトレッキングを何回か体験することにより、徐々に高度順化することで対応できた。

予め持参したダイアモックスは全然使わず、しっかり「お守り」の役目をしてくれた。

なお、仲間の女性の一人はもともと高山に弱かったのであるが、ダイアモックスの服用を工夫（前夜、半錠服用、当日残り半錠を服用するなど）して上手く対処していた。その女性から聞き出した普段聞けない貴重な話「ダイアモックスを服用すると直ぐに指先や脚の関節が軽くしびれてくる、この状態の時は薬が効いている時」だと言う。併せて水分補給を適切に行なえばうまく乗り切れるとのこと。ノウハウだ。

《 世界遺産を巡る 》

仲間からの強い要望もあり折角、遠い南米まで足を延ばすのだから世界遺産も見てこようということで行程の中に織り込んだ。

【イグアスの滝】

さすが米国のナイアガラ、アフリカのヴィクトリアの滝と並んで世界三大瀑布の一つ。その水量の多さと規模の大きさは正に世界一で、80mの高さ、幅120mから流れ落ちる6500トン／毎秒の水量と爆音に圧倒され驚嘆させられた。

アルゼンチン側からブラジル側に凄まじい勢いで流れ落ちる最奥の「悪魔の喉笛^{のどぶえ}」。うなるような水の轟き、水しぶき、虹と、自然のシンフォニーにひたる。

私の感じたところではトレッキングしながら途中、沢山の滝を間近に見られるアルゼンチン側からのトレッキングがお勧めである。

やはり、有名な観光地には世界から沢山の観光客が来ていて、ご多分に漏れず中国からの団体客が来ていた。アルゼンチン側のトロッコ電車で滝を見に行く時にたまたま、中国人の女性添乗員と隣り合わせになった。日本には何度も引率して来られた方で日本語が達者で暫く道中お喋りしたが、なんと100万円／一人のツアーで、我々のような節約旅行と違い皆裕福な方達のようなようだった。



【ウユニ塩湖】

ウユニ塩湖は四国の約半分の広さといわれる塩原で、強い日差しで海水が乾燥して塩が残り、その塩の厚さが200mとのことだ。短い雨期の時に塩の堆積した層の上に水が溜まるが、せいぜい靴底の厚さ程度である。湖全体の高低差は何と全体で50cmと言われ、水面の動きは無く常に上下

